

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ノブジ村 ブータン (南アジア地誌事典・第173回)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮本, 万里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5236

インド通信

第395号 - 2011.9.1 -

インド文化交流センター

〒143 東京都大田区山王1-13-7
臼田わか子気付TEL(03)3772-0960

インド通信版

GAZETTEER OF SOUTH ASIA

<南アジア地誌事典・第173回>



ノブジ村
ブータン

宮本 万里

2004年のクリスマス、私はヒマラヤの山間の村を目指してひたすら山道を歩き続けていた。目の前には荷を積んだ馬が列を先導し、その後ろには馬上の幼いトゥルク（転生僧）を守るように朱色の僧衣を纏った僧侶たちが進んでいく。私の隣には首都の研究所から同行したイシェがおり、振り返ると後方からは友人のカルマが家族を気遣いつつ、ゆっくりと歩いてきていた。

ブータンの首都ティンプーにある研究センターとの数年間にわたる交渉の末、私がようやく1年間の調査ビザをもらったのはこの年の11月のことであった。私はその連絡を受けてすぐに出発の準備

を整えブータンへと旅立った。国立公園下の村落の調査をしたいという私に、政府の環境保護部の長は環境プロジェクトが実施されたばかりの幾つかの村の名前をあげてくれた。その村の一つがトンサ県南部にあるノブジ村であり、2004年以来現在まで私の主な調査地となっている。

ヒマラヤ山脈東端の南斜面に張りつくよ



うに位置しているブータンでは、北部の高山地帯から南部のインド国境まで 7000 メートル近い標高差がある。標高 1200 メートルのノブジ村はブータンでは比較的低位に位置しており、亜熱帯で、冬も温暖な気候が続く。そのぶん夏は暑く、雨の後の山道では無数の蛭に襲われることになる。

季節は既に冬だった。私は夏と冬で住処を移動するという僧侶とブータン王族の古風な慣習に従い、暖かな南の村を調査地を選んだわけである。

しかし、この村にたどり着くのはなかなか至難の業だった。今回は初めてノブジ村を訪れた時の長い行程を描きながらこの村を少しだけ紹介してみたい。

首都ティンブーからトンサ県南部に位置するノブジ村へはほとんど丸 2 日の行程である。ブータンには東西を貫通する自動車道は一本しか通っておらず、その間 3000 メートル近い峠をいくつも越えていくことになる。そのうち、ティンブーからトンサの町までの行程は峠を二つ越えて車で約 8 時間の道のりだ。私はちょうど法要のため村へ帰るといふノブジ出身のカルマの車に便乗した。ティンブーを出ると、長いドライブの後トンサの町で一泊し、夜明け前にノブジ村へむかって出発した。

トンサの町から南へ向かう自動車道は一本であり、ヒマラヤ山塊を源とするマンデ・チュ（川）に沿いながら進む。この道を南部のシェムガン県へ向かって 3 時間ほど下りつづけると、そのうちリュウタラと呼ばれる小さなバザールがみえてくる。ほんの 2・3 軒の商店で構成されるこの小さなバザールが、目的の村へ続く山道の始点である。

夜明け前にトンサの町を出発した私たちがこの場所に到着したのは早朝 7 時過ぎだったのだろうか。車を降りると、先に到着していた僧侶たちは既に出迎えの村人の歓待を受けていた。ティンブーから来た彼らは年一度の寺祭りの法要を村に依頼されており、カル

マはこの時、僧侶たちと友人である私を同時に道案内するはめになっていたのである。

私たちが到着すると朝食代わりのザオ（コメを水につけてから炒ったもの）とスジャ（バター茶）をとり、まずはマンデ川を挟んで対岸にあるニムシオン村に向かうため、道路際から川岸に向かってほぼ垂直に落ちる崖を下り始めた。

川岸までを 30 分ほどで下って吊り橋を渡り、1 時間半ほどをかけて対岸の崖壁をのぼる。そこにニムシオン村があり、ノブジ村まではそこからさらに 6 時間の道のりだと聞いていた。ニムシオンを出るとその後は幾つかの小さな谷を越えながら狭く切り開かれた長い山道に行く。道の谷側にはバナナの葉が生い茂り、時折ラングール猿の群れが横切っていく。亜熱帯の森に馴染みのなかった私は、最初のうちは周囲の見慣れぬ風景に胸が高鳴っていた。しかし、ニムシオンを出て 5 時間を過ぎたころには周囲の景色を楽しむ余裕もなくなってくる。

ようやく人里の気配がしはじめたのはそれからしばらくしてからだった。目の前に石垣で囲われた窪地が広がり、その中に十数本のオレンジの木が取り残されたように立っていた。果樹園のようだ。村が近いことを知った私とイシェは元気を取り戻し、徐々に傾斜し始めた道を一気に下っていくと、幅 6 メートルほどの川に出た。川には丸太で組んだ隙間だらけの橋がかかるだけだが、馬も慣れたもので平然とそれを渡っていく。川を渡り鬱蒼とした森を抜けると小学校や国立公園事務所、郡の保健所などがみえてきた。村はすぐそこのはずだった。

鉛のような足を引きずりながら急勾配の山道を必死で登りきると、一気に視界が開けた。目の前には段々畑の美しい、緩やかな傾斜を持つ台地が広がり、台地の上部には集落がみえる。その裾には二本の大樹に守られるように黄色い屋根の仏教寺院が佇んでいる。そこがノブジ村だった。

寺は村の入り口に位置しており、その前庭



に入ると先に到着していた僧侶たちが車座になって石畳の上に座り、村人から歓迎の杯を受けていた。一杯飲んで落ちつくと、僧侶たちが読経を始める。辺りには夕闇が迫り、気温も少しずつ下がり始めているようだった。私も僧侶たちの末席に当然のように座らされ、静寂に響く読経の声を聴いていた。一刻も早くどこかへ入って湿った服を着替えたかったが、その場を抜けるのは至難の業のように思えた。諦めてふと空を見上げると月がずいぶんときれいだった。この日から私のノブジ村での暮らしは始まった。

酒飲みの多いこの村でのインタビューは、まずは出された自家製酒を飲むことから始まる。周辺の山を拓いて作ったトウモロコシがその主原料となっていた。西ブータンで当然出てくるバター茶などは、ここでは滅多に出てこない。お茶もバターも村の外から買わねばならないからだ。村には電気が来ていなかったのも、夕方の調査では懐中電灯が必需品だった。忘れたときには乾いた竹の束を松明にして村はずれの家まで帰った。村には木製の湯船が一つあり、それを村の中心にある巨大な枯れ木の洞にはめ込み、洞から出る部分は適当な布で覆って風呂に入る。かなり大

変な作業だが、湯船から洞をとおして見上げた夜空は絶景だった。

それと対極に最も壮絶だったのは家じゅうどこにでもいる蚤との戦いだろうか。これは本当に辛かった。堪りかねてバルサンを焚いた私を見た友人たちの悲しげな眼がいまだに忘れられない。

けれどもこうした村にも近々電気が入らしい。自動車道の建設も進んでいる。次回はほんの数時間で村にたどりつけるのかもしれない。私が見てきた暮らしも次の数年で大きく変わっていくだろう。けれども恐らく私は村までの長く辛い道りを含むあの冬の出来事のすべてをいつまでも懐かしく、楽しく思い出すだろう。

写真：

- ・寺祭りに集まる村の人たち
- ・夕食前、とりあえず濁り酒を注ぐお母さん

みやもと まり：国立民族学博物館現代インド地域研究拠点。専門は南アジア地域研究、政治人類学。著書に『自然保護をめぐる文化の政治—ブータン牧畜民の生活・信仰・環境政策』風響社、2009年。

